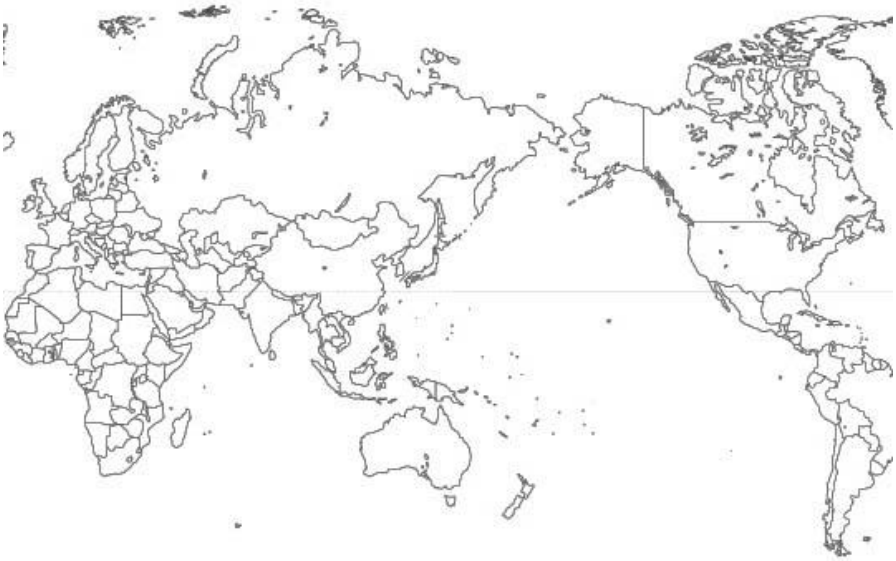
１世界の中の中東



はじめに

上の世界地図を眺めてみよう。わずかな情報しか書き込んでいない見慣れた白地図である。この無味乾燥な地図に、ボストン、パリそれに北京の位置を書き入れて下さい。出来たら次にイスタンブール、カイロを書き入れて下さい。これらはいずれも世界の国々のよく知られた都市です。

皆さんの手を煩わすこんな質問で始めたのは、だいぶ前にあることでショックを受けたからです。それは、アメリカの某大学の学生を対象に、白地図を開いて東京の場所を印してもらったことにはじまります。結果は悲惨でした。正確な位置に印した人はほんの数パーセント、なんとか日本の国土の中に印した人も３割に過ぎない。他の多くは中国大陸の中や東南アジアのベトナムやタイの近辺に印をつけました。地図をみる機会が少ないのかも知れませんが、日本への関心の低さに唖然としました。我々日本人がアメリカを知るほどに彼らは日本に関心をもっていないという現実を知りました。

しかし、日本の学生も似たりよったりです。数年前の私の授業で、小テスト用の紙を配りそこに世界地図を書いてもらったことがあります。結果はやはり悲惨でした。世界地図は見慣れているのだろうが、いざ書くとなると難しいようで、東南アジアの部分が全く欠落したもの、アフリカがヨーロッパとつながっていて地中海がないものなど、なんともバラエティーに富んでいました。国際化の時代、世界の国々が地球のどこにあるか位は知ってもらいたい。そんな気持ちが強くしました。

中東という名称について

図 1-1　世界のなかの中東

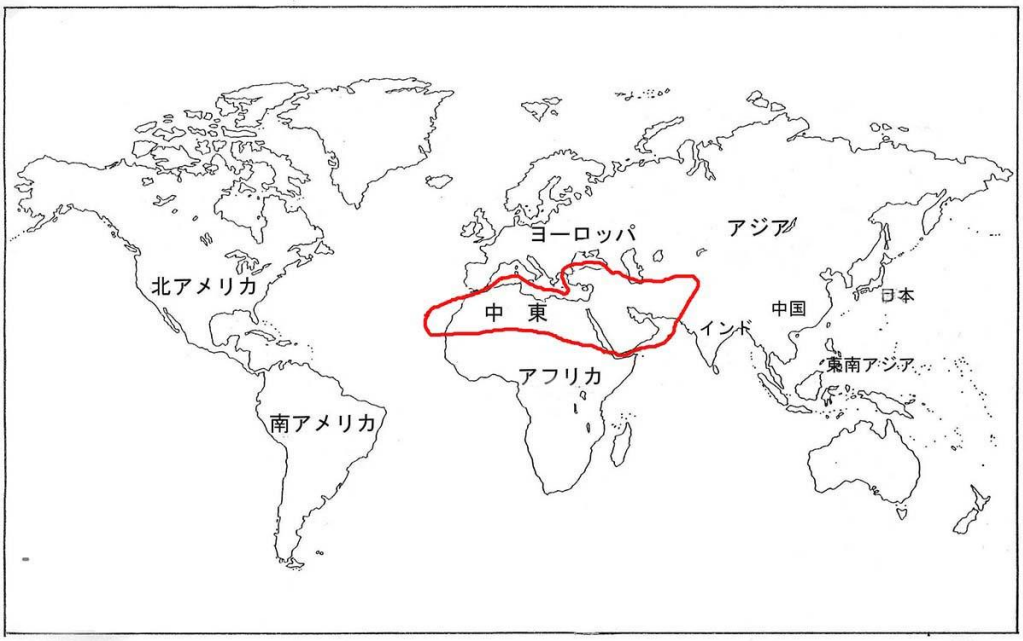


図 1-1 の世界地図を見よう。赤線で囲ったところが地域としての中東です。「中東・北アフリカ」という人もいます。

この地図をみて、我々の見慣れた、日本と太平洋を中心とした世界地図との違いに気づくでしょう。ヨーロッパでも南北アメリカでも世界地図といえばこの大西洋を中心としたこの地図です。もちろん中東もそうです。

この地図では日本は右（東）の端になります。地図で東の端にみえる日本、朝鮮半島、台湾、また中国の東部、それに東南アジアの一部の地域は、**極東（Far East）**と呼ばれてきました。

1960 年に日米安保条約が結ばれた時、「極東における国際の平和と安全の維持」のために米軍が日本の施設の使用が認められる、という条項をめぐって、極東の範囲とはどこなのか国会で大議論になったことがありました。範囲が明確に決まっていた訳ではなかったのです。

南極や北極と同様に極東には東のはずれという感じが強く、地域の名称として使われる

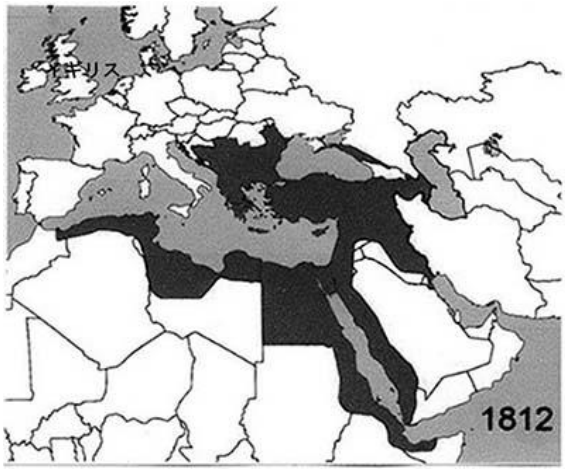
極東は、我々日本人にとって気分があまりよくありません。太平洋を中心とした世界地図では日本は世界の中心であって決して東の端ではないからです。

では極東という用語はどうして生まれたのだろうか。東とか西という限り真ん中があるはずです。この真ん中がヨーロッパ、とくにイギリスであって、この極東という呼び方は西欧こそが世界の中心だという 19 世紀の西欧の人々の世界観にもとづくものでした。もっとも現在の西欧人がこうした世界観をもち続けている訳では必ずしもありません。

彼らが西欧こそ中心と強く思っていたのは、黒船がやってきて日本が右往左往していた 19 世紀半ばころからです。イギリスをはじめフランスやドイツも産業革命をとげて工業化を進め世界の強国としてアジアへの進出を強めようとしていました。ヨーロッパの全盛期といってもよい時代に、ヨーロッパ中心の世界観が強まりました。西欧諸国は東に向かって勢力を伸ばし、機械制工業によって大量生産された綿製品などの市場を世界に拡大しようと中東やアジア諸国に圧力を強め開港を求めていました。

ちなみにアメリカの黒船はどこからやってきたのだろうか。太平洋を中心に描いた世界地図を見慣れた我々にとっては、直感的に太平洋を渡ってきたのだろうと思います。だが実際は、アメリカの東海岸から大西洋を渡りインド洋経て東南アジアのフィリピン経由でやってきました。つまり西から「東の果て」にはるばるやってきたのです。

図 1-2　19 世紀初頭のオスマン帝国



西欧中心の世界観は西欧が圧倒的な力をもっていた時代に生まれ作られたものですが、**中東（Middle East）**もまた、極東と同様に歴史的にヨーロッパ中心主義を反映した呼称

です。19 世紀にイギリスがアジア支配を強める過程で考え出された地域の呼び名です。

当時「中東」はおもにイランやアフガニスタン、それにその周辺地域を指していました。西欧の東には、イランよりも近いところに現在のトルコのイスタンブールを都とする**オスマン帝国**がありました。19 世紀の初めにこの帝国は、現在のトルコとアラブ諸国の多くの地域、さらにギリシャとバルカン半島を支配していました（図 1-2)。西欧ではこの帝国の領域と周辺を**近東**と呼んでいました。つまりヨーロッパにより近い東が近東で、そのさらに東が中東、そしてもっとも遠い東アジアが極東でした。

オスマン帝国は 19 世紀中ごろには弱体化し、その領域が西欧によって一つ一つ切り取られ、そして 1914 年にはじまる第一次世界大戦で敗北し、帝国は解体されて影も形もなくなりました。

その後、西欧に政治・経済面で従属状態に置かれていたアラブ地域やイランなど今日の中東地域全体は**中近東**と呼ばれるようになり、第二次世界大戦後しばらくして**「中東」**と呼ばれるようになりました。西欧を中心とした地域の呼称が現在も使われているということです。

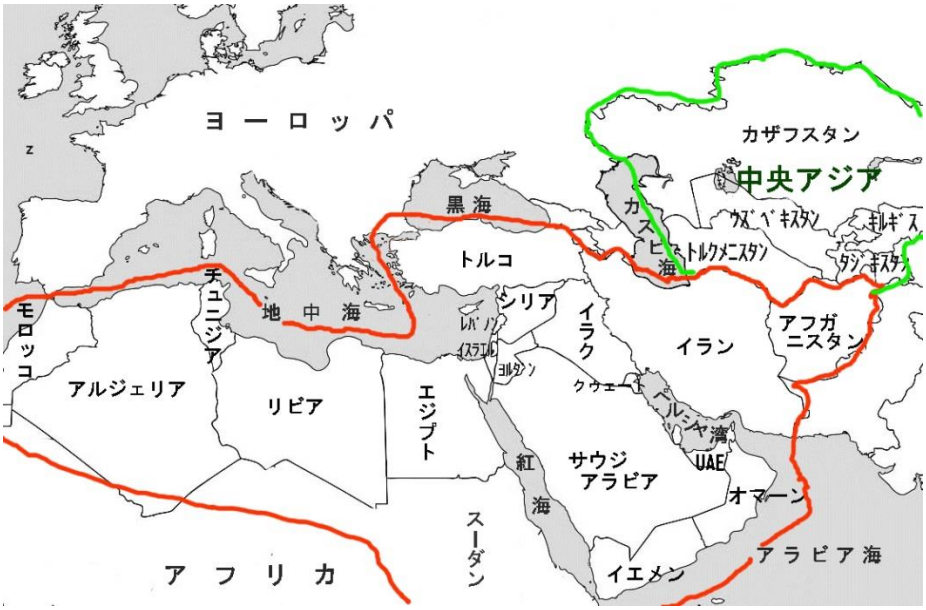
中東とヨーロッパ

図 1-1 では、赤線で中東の範囲が囲ってありますが、これをみるとわかるように、中東は地中海を挟んでヨーロッパに隣接しています。日本で考えると、朝鮮半島や中国、台湾のように近く、それだけ中東とヨーロッパとは深い関係を歴史的にもってきました。中東イスラム世界の優れた文化と技術がヨーロッパに伝えられた時代もありました。

しかし 17 世紀以降に西欧が近代化と工業化を進めていったのに対して、中東では専制国家の体制をなかなか改革できず科学技術の発達も遅れ、軍事的に領土を侵食されて西欧との力の差を思い知らされることになります。これを一般に**西欧の衝撃（ Western Impact）**といいます。19 世紀になってこの遅れに気づいたオスマン帝国やイランでは制度改革を進めて近代化をはかろうとしました。しかし成功することなく、西欧諸国の直接的また間接的な支配を受けるようになりました。

第二次世界大戦後になって、中東の多くの国は実質的に独立して近代化の道を辿ることになりますが、政治が安定しないまま戦争、内戦が繰り返され、今日に至るまで不安定な状態が続いています。この第二次大戦後の政治・経済については後にくわしく話すことになります。

図 1-3　中東と中央アジア



中東の範囲

中東にはどんな国があるのだろうか。図 1-3 で確認してもらいたいが、**東はアフガニスタンから西は北アフリカのモロッコ**まで、地図に国名が書かれた範囲（中央アジアを除く）を中東といっています。地域的には、**西アジア**と**北アフリカ**を合わせた範囲です。

北アフリカには、エジプト、スーダン、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコの国々があります。このうちエジプトとスーダンを除いた国々を**マグレブ諸国**と呼んでいます。マグレブはアラビア語で「西」を意味する言葉です。イスラム教の聖地であるアラビア半島のメッカからみて西にあるのでこの地域がそう呼ばれてきましたが、現在の国でいえば以上の 4 か国のことです。

また近年、**MENA（ミーナ）**という呼び方が、とくに経済的に中東と関係をもつ人たちの間で使われるようになっています。**ＭＥＮＡ**は Middle East and North Africa の略であり、中東地域のことを指しますが、一般的な使い方としては中東諸国すべてを指すのではなく、世界の企業にとってビジネスチャンスがある国々だけを MENA 諸国と呼ぶ傾向があります。

図 1-3 で緑の線で囲ってあるのが**中央アジア**です。カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、キルギス、タジキスタンの５つの国があります。この地域にはおもにトルコ系、イラン系（ペルシャ語系）の人たちが住み、歴史的に中東と深い関係があります。この

ため中東のなかに組み入れて一つの地域とすることも可能です。しかし、1991 年まで旧ソ連を構成する共和国であり、独立後はロシアを中心とした独立国家共同体（CIS）の加盟国であることで、中東とは区別されています。

中東地域の共通項

中東という地域区分を中東の人たちは必ずしも是認している訳ではありません。我々はトルコも中東の国のとして扱っていますが、トルコ人にそう思っている人は必ずしも多くありません。とくにアンカラやイスタンブールの都市に住む人たちは、「トルコは中東の国だ」と思いたくない人が多くいます。ヨーロッパに帰属しその一員になりたいと思っている人たちです。トルコは西ヨーロッパを中心とした軍事同盟、NATO の一員であり、サッカーのワールドカップもヨーロッパリーグに属しています。そしてヨーロッパ連合（EU）に加わることを長期に熱望してきました。ヨーロッパのユダヤ人が建国したイスラエルも同様です。とくにイスラエルは、その歴史的経緯から、中東のアラブ世界と平和的に共存しようという意識はきわめて弱いといってよいでしょう。

また中東地域の国々は、相互の経済的なつながりも政治的なまとまりも乏しい。ヨーロッパの EU のような地域連合はなく、東南アジアの ASEAN のような中東全体を網羅した地域市場も存在しない。むしろ国家間の紛争がもっとも多い地域です。1980 年以降だけでも、イラン・イラク戦争、湾岸戦争、イラク戦争、シリア内戦、イェメン内戦、イスラム国をめぐる戦争などが続き、これにアメリカなどが政治的・軍事的に介入してきたことで、政治・経済が混乱し、経済発展から取り残された国が多くあります。

こうした地域連合への兆しも見ることができない中東が、便宜的とはいえ中東として他の地域と区別されてきたのは何に依るのだろうか。他の地域と区別される何かしらの共通項があるはずです。そのもっとも大きい要素がイスラム文化圏ということでしょう。ヨーロッパをキリスト教世界と呼ぶように中東はイスラム世界と呼ばれ、イスラムが地域の文化と社会の共通項になっています。イスラムについてはいずれ詳しく学ぶことになりますが、イスラムの神であるアッラーの啓示による共通の法と価値観のもとで生きる人々の世界として括られているのが地域としての中東です。

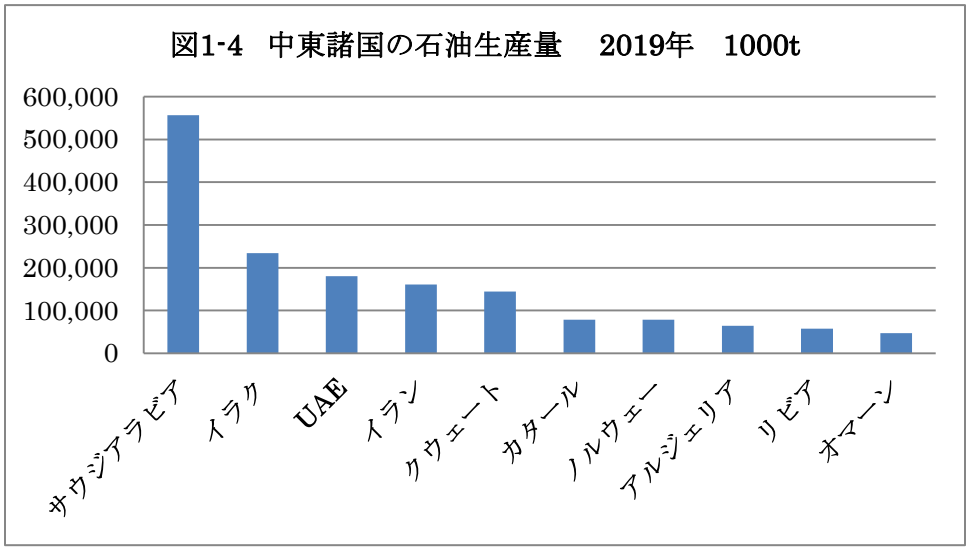
もちろんここに住むのはイスラム教徒だけではない。この点ではヨーロッパも同じで、西欧では移民による多くのイスラム教徒が居住し多文化化が進んでいるという現実があります。

湾岸諸国と石油

つぎに、中東にはどんな国があるのか概要します。

まず中東には多くの産油国があり、世界に石油を輸出してきました。日本も輸入する石油の８割以上は中東産油国からです。主な油田地帯はペルシャ湾とその周辺、また北アフリカであり、とくにペルシャ湾岸の油田は埋蔵量が多く、現在確認されている世界の石油埋蔵量のほぼ 6 割がペルシャ湾とその周辺にあるといわれています。

石油の生産量を示した図 1-4 のみてわかるように、サウジアラビアが中東でもっとも生産量が多く、1973 年からほぼ 10 年の間、世界の石油価格をコントロールする力をもっていました。イランも石油生産の高い能力をもっているのですが、アメリカによる長期に渡る経済制裁によって現実の生産量は少なくなっています。



これらの中東を代表する産油国はその多くがペルシャ湾を囲む国々で、**湾岸諸国**と呼ばれています。

イラン、イラク、サウジアラビア、クウェート、サウジアラビア、
UAE（アラブ首長国連邦）、バハレーン、カタール、オマーン

湾岸諸国のうち、アラビア半島にあるアラブ人の国々は、湾岸協力会議（GCC）に加盟し、**ＧＣＣ諸国**と呼ばれています。（湾岸諸国からイラン、イラクを除いた 6 か国）

図 1-5　湾岸諸国

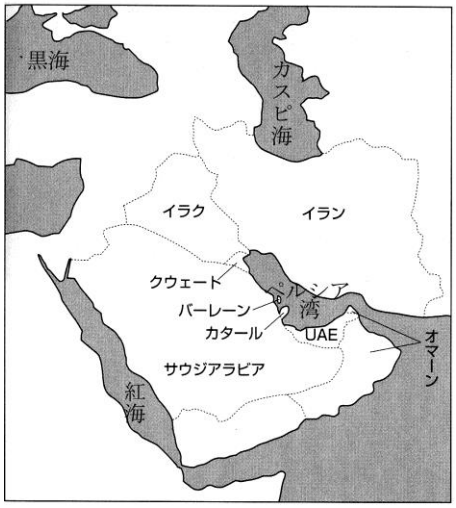
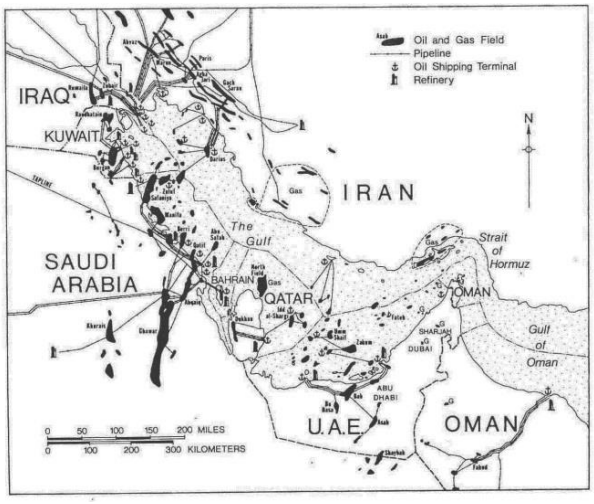
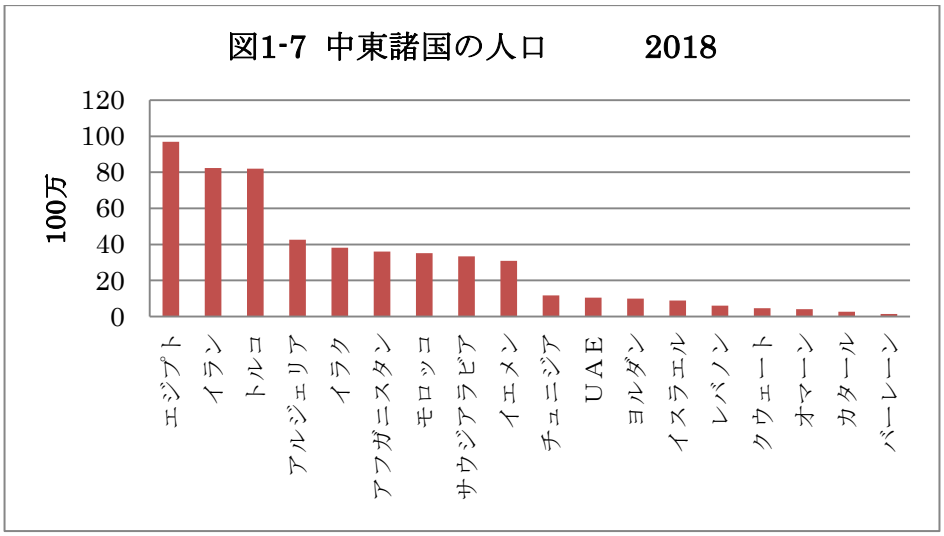


図 1-6　ペルシャ湾周辺の油田地帯



人 口



つぎに、中東諸国の人口に注目しましょう。図 1-7 からわかるように、人口はエジプト、トルコ、イランで多く、2018 年の統計では、エジプト 9842 万人、イラン 8180 万人、トルコ 8081 万人の人口がありました。この 3 国はいずれも歴史的に帝国を繁栄させた時代があり、中東を代表する国でもあります。エジプトはアラブ系、イランはイラン語系、トルコはトルコ語系の言語集団を代表する国でもあります。いずれも人口成長率が高く、将来的に人

口が急増すると予想されています。これは日本とエジプトの人口ピラミッドを示した図 1-8、図 1-9 からも明らかです。

図 1-8　人口ピラミッド（エジプト）

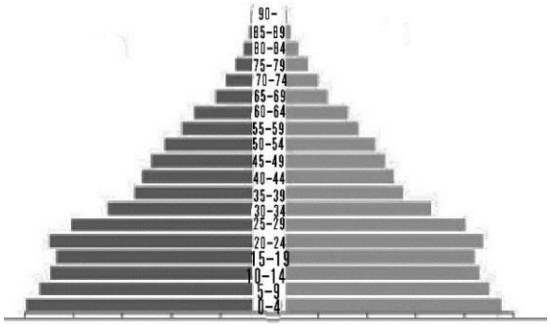
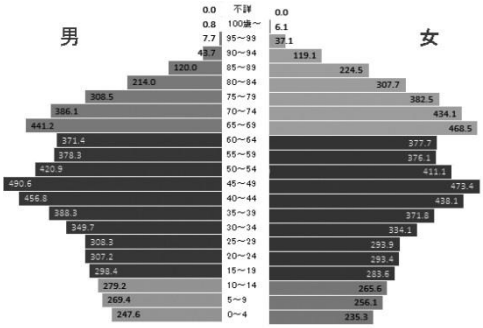


図 1-9　人口ピラミッド（日本）



人口ピラミッドとは、縦軸に年齢、横軸に人口をおき、男女別および年齢別に人口を図式化したものです。この形をみるとそれぞれの国の人口構造の特徴がわかります。またそれぞれの国が抱えている人口問題もおおよそ知ることができます。

人口ピラミッドの型を比べてみると、日本は**つぼ型**、エジプトは典型的な**富士山型**です。日本も第二次世界大戦の直後まではエジプト同様に富士山型をしていました。多産多死の時代には一般に人口ピラミッドは富士山型をしていました。しかし死亡率が低下していくと富士山型の国では人口が急増することになります。日本は明治維新から 2006 年にピークに達するまでに人口は 3.8 倍に増えています。しかし、出生率が低下するにしたがってつぼ型に変化し、少子化が進み、将来的には人口が急激に減少していくと予想されています。

一方、エジプトは 1980 年に 4055 万人でしたが、2019 年には 9842 万人に増え、わずか 40 年で 2.4 倍に増えています。こういう国では生産年齢人口（15～64 才）が総人口に占める割合が高く、失業もまた若年層において高くなります。2011 年にエジプトで「アラブの春」と呼ばれる政変（革命）が起こりました。当時の失業率は 12%でしたが、若年層については 20%を超えていたといわれており、この若年層が革命の主たる担い手になりました。また 15 才未満が人口全体のほぼ 3 分の 1 を占めています。20 年後にはこの層が人口ピラミッドのより上位の年齢階層にシフトし、人口は 1 億 2000 万人を超えると予想されています。経済が人口成長率以上に発展しないと若者の失業率はさらに上昇する可能性があり、厳しい人口問題を抱えることになると思われます。

図 1-10　人口ピラミッド（サウジ・ＵＡＥ）

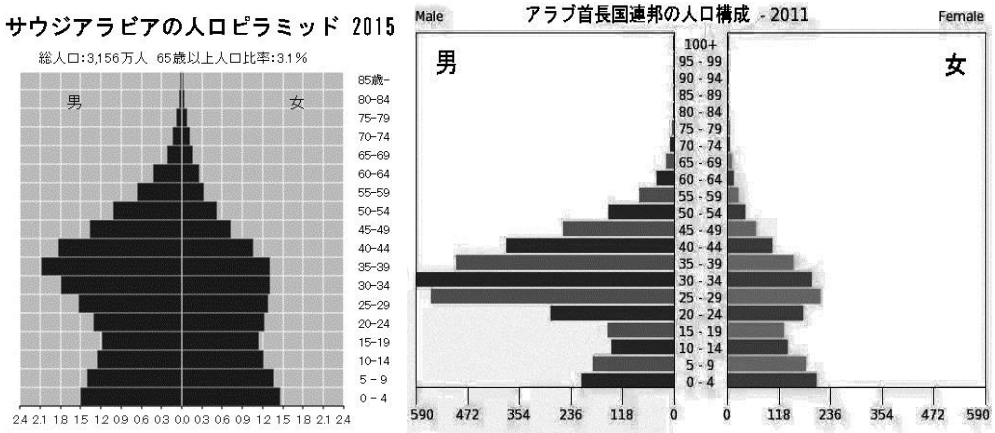
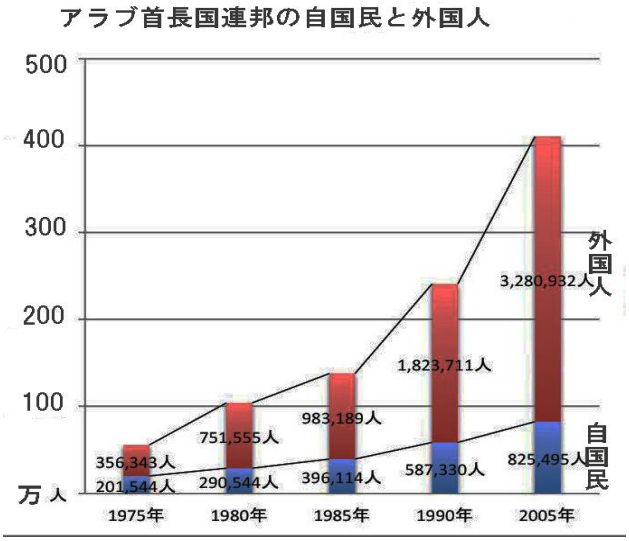


図 1-10 は、サウジアラビアとＵＡＥの人口ピラミッドを示しています。これをみるといずれの国も、20 代から 40 代の人口が多く、とくに男の人口が大きく膨らみ、男女の人口が異常にアンバランスになっています。



これは、この 2 つの国が石油輸出国として豊かな国であり、労働力の多くを外国人労働者に依存しているからです。サウジアラビアの場合、肉体労働をサウジアラビア人は嫌い、ほとんどを外国人労働に依存してきました。少し古い資料ですが、図 1-11 をみると、製造業、建設業、卸業、メイドなどの労働に従事しているのは圧倒的に外国人であり、サウジアラビ

ア人は役人、教育関係に集中しているのがわかります。メイドは女性が多いが、他の労働はほとんどが男性、これが人口ピラミッドのアンバランスな形の要因となっています。

サウジ、クウェート、ＵＡＥに外国人労働者としてやってくるのは、中東地域内からを除くとインド、パキスタンなどの南アジアの人々、メイドは東南アジアの女性が多い。

図 11　サウジアラビアの産業別、自国民と外国人労働者数

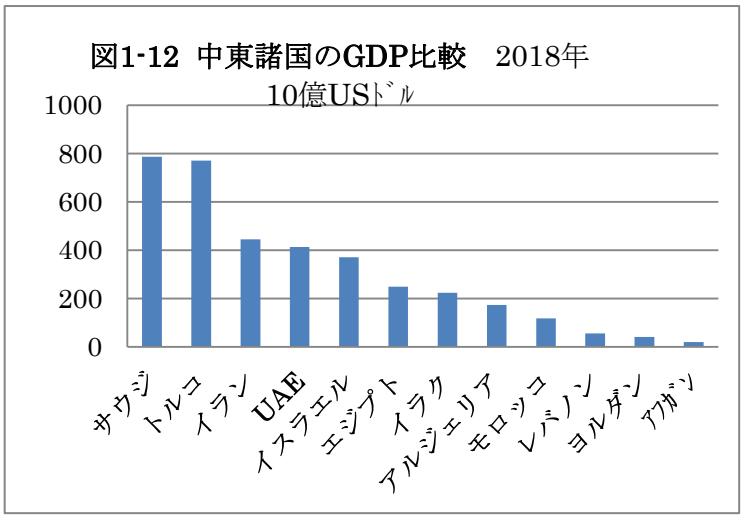
	サウジ人	外国人
農業	15 万人	19 万人
製造業	9 万人	38 万人
建設	4 万人	54 万人
卸小売	18 万人	65 万人
行政	115 万人	4 万人
教育	63 万人	9 万人
医療	14 万人	14 万人
メイド	—	52 万人

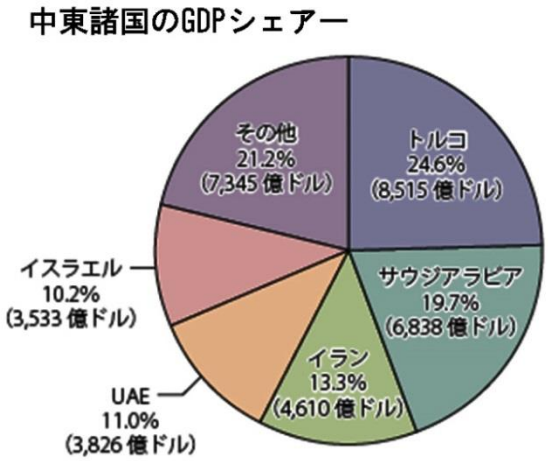
ＧＤＰ（国内総生産）

先に、エジプト、イラン、トルコが伝統的な大国だといいましたが、図表 1-12 をみると、国の経済力を示す国内総生産ではサウジアラビアとトルコが大きくなっています。この 2 国と比べるとエジプトは半分以下です。ＧＤＰが大きいサウジアラビアは中東最大の産油国であり、石油輸出によって経済力を強めてきた国です。しかし国土のほとんどは砂漠で、前近代的な専制君主国です。

イランは長年アメリカから経済制裁を受け、この制裁が大きな要因となり経済的な発展が遅れた国です。エジプトも経済的には発展することができなかった。これらの国についてはいずれ詳しく紹介することになるでしょう。

また中東では国家間の経済格差が非常に大きい。国民一人あたりの所得をくらべると、2000 ドルに満たない国が多い一方で 12000 ドルを超える国も 4 か国ある。スーダンとカタールでは 10 倍の所得格差があります。





新型コロナの蔓延で、大学でみなさんの顔を見ながら授業をすることが残念ながらできず、春セメスターについては、毎回、こうした講義の文章を送り、学習してもらうことになります。ていねいに読み、わからないところは調べて、毎回、800 字前後に要約して私のところに送ってください。